

地域における子どもにとって愛着のある場の分析 ～拡張された園庭としての公園に着目して②～

○淀川裕美・野澤祥子
(東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター)

【問題と目的】 保育で活用している公園は「体力・健康」「感性」「知的興味」「基本的生活」との関連が強い(浦田他, 2018) など、単なる物的対象・空間ではなく、保育者にとっては子どもたちの育ちを支える場であり、子どもにとっても様々な経験ができる、何らかの思いを抱きながら遊ぶ場であると考えられる。しかし、保育における地域の公園活用については、距離や安全性、設備、自然環境等の構造的要因(田中他, 2009; 椎野, 2007)や活用の実態(三輪他, 2008)に関する研究が多い。

そこで本研究では、地域の公園を「拡張された園庭」(秋田他, 2018)と捉え、地域の公園活用における保育士の目的意識を調べると同時に、写真投影法(野田, 1988; 藤田, 2001; 山口, 2002; 宮本他, 2017)を用いて、子どもたちが公園の中で愛着を感じている場への認識としてどのようにあらわれるかを検討する。具体的には、担任保育士の語りと、その内容に関連する子どもの写真および語りから、子どもたちが地域の公園でどのような経験をし、そこにどのような愛着を感じているかを検討した。

【方法】

1)調査協力者

都内私立認可保育所A園の5歳児クラス園児16名および担任保育士1名(経験年数年)。X園はビルの中に設置され園庭が併設されず、地域の公園やその他施設を頻繁に利用している。本研究では地域の公園での子どもにとって愛着のある場に関する検討を行うため、頻繁に公園を利用しており、かつ園児の写真投影法調査を承諾されたA園に調査協力を得た。

2)協力園における公園利用の日数・時間帯

一週間のうち特別な行事や活動を予定していない日は、なるべく公園に行っている。朝10時に園を出発し、もっとも遠い公園で10時半までに公園に到着。30分程度遊び、11時頃に公園を出発し、11時半頃に園に到着。遠いところでは徒歩で30分近くかかる公園にも行く。

3)調査時期

園児の写真撮影及びインタビュー調査は2018年7～11月。担任保育士へのインタビューは同年12月に子どもたちの午睡中に行った(所用時間41分)。

【結果】担任保育士が語った地域の公園活用の主な目的は、【心身の健康のため】、【屋外ならではの遊びをするため】の2つであった。また、この2つ以外の子どもが捉えていた内容についても、「その他」として分析した。

1)心身の健康のため

◆保育士の語り

担任保育士は「体調に合わせながら、寒さに負けない体力づくりもねらいとしてやっている」「お部屋の中の日が続くと、気持ちももやもやしてケンカが多くなったり、些細なことでトラブルになったりするので」「やっぱり外に出ると生き生きとして発散ができるので」、「なるべく、晴れている日にはお外に出ようと思っています」と語っている。

◆子どもの写真と語り

写真a～dでは、それぞれを撮影した理由について、心理的な心地良さ(「(靴脱いで歩くのが)気持ちいいから」「(探検するところが)綺麗だから」「(空が)大きかったから」「(アメンボが)かわいいから」)が語られている。

また、写真e～fでは、身体を使って遊ぶ鬼ごっこや追いかけっこ、木登りをする場所が撮影されている。地域の公園において心身の心地よさを感じていることが、公園での愛着のある場の認識に繋がっていることがわかる。



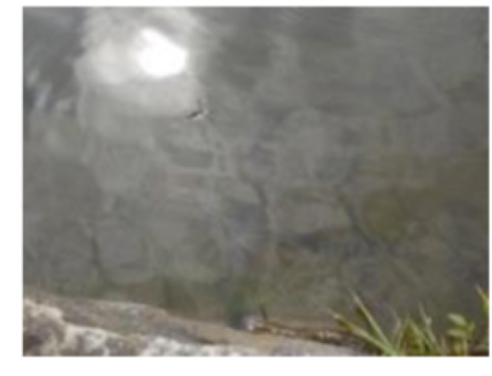
a. 7/11*「凸凹しているところ」「靴脱いで歩くの」「気持ちいいから」



b. 7/11*「探検するところ」「今日はカエルを見つけた」「綺麗だから」



c. 9/19*「木が生えていて、空が見えるところ」「大きかったから」



d. 10/3*「アメンボがいるところ」「よく見る」「かゆいから」



e. 7/4*「いつも鬼ごっこしたり、追いかけっこしたりする」



f. 9/19*「登るところ」「足とかでとかぶらんとする」

2)屋外ならではの遊び

◆保育士の語り

担任保育士は「お部屋でできない遊びもあって、例えば鬼ごっこだったりとか、そういう身体を使った遊びはお部屋ではできないので、外でやっています」と語る。具体的には、鬼ごっこ、リレー、砂場遊び、落ち葉遊び、焼き芋ごっこ、ままごと、虫探し、探検などを行っている。そして、社会性、自然科学、季節を感じる、考えることなど、「遊びを通しての成長」を意識している。

◆子どもの写真と語り

先述のe～fのように身体を大きく使う遊びを好んでいる園児が多かった。また、写真g～iのように、多様な植物と出会い、花・葉の色や模様など美しさに関心を持ったり、既知の植物との関連を考えたりしていた。さらに、写真jのように虫や鳥、鯉などの動物と出会い、生死に触れる経験もあり関心を持っていた。このように、多様な自然との出会いを通して地域の公園に愛着を感じることに加えて、写真k～lのように自然環境を使って行えるごっこ遊びや探検などの自由遊びの経験が公園での愛着のある場に繋がっていることもわかる。



g. 9/19*「草の中に生えているお花」「いつもお花があって」「かゆいから」



h. 7/4*「お米みたい」「新潟の公園にお米がある。写真で見て見た」



i. 11/28*「いろんな色の葉っぱが集まっているところ」「見に行く」



j. 10/3*「とんぼが死んでた」「撮りたかったから」「虫が好き」



k. 7/4*「葉っぱをのせてお料理」「ごっことかいろんなのできる」



l. 11/28*「秘密基地、迷路、探検する場所」「虫探しとか迷路とか」

3)その他

園児の中には、過去の自分の姿とのつながりで愛着のある場について語ったり、自分たち以外の地域の人たちへの関心を示したりする子どももいた。例えば写真mでは、小さい頃から何度も訪れる公園で、小さい時は登れなかったが大きくなったら登れるようになったと語っている。

担任保育士も、公園での遊びについて、鬼ごっこの時の子どもたちの工夫の仕方や砂場遊びでの協同の仕方の成長などを語っており、地域の公園での愛着のある場には子どもたちの過去の経験や姿、先生による子どもの育ちの見取りなどの歴史性が含まれることがわかる。

また、写真nのように、子どもが先生やお友達と一緒に遊びながらも、公園を訪れる地域の人への関心を持っていることがわかる語りもあった。公園での愛着のある場には、園内に留まらない広がりも反映されていた



m. 11/28*「ジャンプして丸いところに座る」「小さい時は登れなかった。大きくなったら登れた」



n. 11/28*「おじいさんとかが休むところ」「真ん中の綱が鬼ごっこのゴール」「ここまでいっぱい走れる」

【謝辞】本調査にご協力くださいました園児の皆様ならびに担任保育士の先生、調査実施をご快諾くださいました保護者の皆様ならびに施設長の先生に心より感謝申し上げます。

【付記】本調査は、東京大学 発達保育実践政策学センター (Cedep) の研究プロジェクトとして、宮田まり子(白梅学園大学/Cedep協力研究者)と共同で実施している。

園外ゆえに安全への細心の注意を払い、つねに緊張感を持ちつつも、子どもの主体的で個別的な遊びの選択を保障していることで、公園での愛着のある場に関する子どもたちの捉えが多様なかたちで現れたのではないか。

今後さらに、子どもたちの多様な認識を担任保育士がどのように捉え、応答するかを検討したい。